





岡 麓 著 入信歌稿第一編

歌集涌井

皇書房刊行

井 涌

昭和二十三年九月十五日 第一刷發行
昭和二十四年十一月三十日 第二刷發行

定價二百圓

著者 岡

麓

發行者

鎌田 敬止

東京都大田區調布嶺町一ノ三三四

印刷者

塚田 十五郎

東京都千代田區神田神保町三ノ二二三

發行所

白玉書房

東京都大田區調布嶺町一ノ三三四
振替口座東京一六三〇九八

目次

離京	三
信濃明科	七
内録	二五
夏日	三五
野萩	七一
凌霄花	七六

雪解	二五
馬酔木	二六
大雅堂	二七
梓	二八
藪かげ	二九
初雷	二九
閑適	三〇
泉野村	三〇
後記	三三

涌

井

離京

昭和二十年三月十三日夕

入り目空惜む名残はわたくしの身にのみかかる
嘆きならずも

同夜空襲の火は神田銀座を火の海とせり

今見てゐるそのごとく火はわが家をも焼き拂
ふべく襲ひ來らむ

かかる時やまひづきては去りがたく思ふもの
からとどまりかねつ

十四日朝代代木山谷の家を老妻と立つ、子供三人、橋本竹治氏附添ひ八王子迄電車に乗りぬ

空襲の焼灰が降る朝早くせきたてられて家を
立ち出づ

今朝の日のあやしく赤き空にむき都はなるる
名残を惜む

住み馴れし二十年餘の知人の誰一人にも別を
告げず

ここに住みわが身終へむとねがへりし心だが
ひぬいつまで生きなむ

去りがてに思ふものから時せまり促されては
友に被負りぬ

わが年^{とし}齡^しを今^{いま}かんがふるにあらねどもたち歸^{かへ}
り來^こむ希^{のぞ}望^み更^{さら}になし

八王子の街^{まち}を背^せ負^おはれ汽車^{くるま}に乗^のる老^お人^{ひと}をふり
むく人に餘裕^{あま}なし

信濃明科

辛^{からう}じて汽車をば降りて日の暮れし驛の戸口の
柳を見たり

この驛の乗降^{のりおり}やすく杖つきて暗きちまたにわ
れ息^{いき}づきぬ

妻子らと宿の夕飯ゆふげをすませては
大息たのいきしけり心
ゆるみて

つきそひて來りし子らがただ
一夜ひよ翌朝あした歸るあ
わただしけれ

子ら行かば離はなれ小島にのこさるるおもひしにけ
早こく來ね

遠く來て病みてく
らせば櫻咲く外もぎ明るしと誰
いふとなく

日のささぬ宿の二階のこもり居にバスのとほ
るを待つは何ゆゑ

遠く來て病み臥すわれに春遅き信濃の櫻咲く
といふなり

此處に來て心うちらぶ侘れをれば城山じやうやまの櫻の花に誘さそは
れにけり

住みつかむ信濃の櫻咲きたれば病堪こらへて誘さそは
れいでぬ

馬市の馬をつなげる假小屋に櫻の花の枝かぶ
されり

眺^{ながめ}望^めよき小山に登り夕^{ゆふ}映^{ばえ}の櫻見てをれば櫻ち
り來^くる

信濃路は寒しといへどゆく水の流に蓬つむべ
くなりぬ

同宿の中村善策氏に

龍門の景色といひて繪にもかくと君はかたれ
どさぶしわ、れには

門前かどまへに若木わがきのしだれ櫻うめ咲く札處ふだしよにも來る人な
かりけり

鄙びびたる寺門てらもんのしだれ櫻うめ咲き老人らうじん一人ひとり杖つゑつき
憇さむふ

田舎いなかみち名所なしょ圖會ずゑにもありぬべき寺門てらもん前に立
つわれひとり

春の雨にありけるものを山驛さんえきの旅宿りやどの炬燵かまどに
病やしなふ

雨やまぬけふ寒けきに梯子段おりるたびに見
る海棠の花

近く住める人より借讀す

假名法語無難禪師の眞蹟は石版刷すりの表紙なき
本ほん

易イ易イと書きながしたる假名ぶみの假名のはこ
びにしるき筆癖ヒツヘク

人によりきびしくいひて近づけぬ教オシヱを假名に
解トクきしるしあり

たはやすく思はむ人は假名ぶみを讀み解く力
持たざりしかな

としまねく都の春に待ちつけし燕來れり信濃
明科あかしな

この鳥のゆききするとはおもはねど燕の飛べ
ば都おもほゆ

から車引き行く馬の背をかすめ燕が一つおり
てはあがる

戦争に焦土の原とかはりたるところにも来て
燕の飛ぶか

ひと月のやどりに馴れて北むきの窓あけ街を
飛ぶ燕見つ

燕よりひと月先に來居れりと誰にいふともな
しにつぶやく

十句観音經

南無ほとけ朝念暮念觀世音立てばまろぶをあはれ憐
みたまへ

一もとの海棠の花若葉木のながめとなりぬ山
山の雨

芽ぶき木の梢動かし風の吹くゆふべの山は雨
よらむ

櫻ちりなほ海棠の花ざかり雨のふらくに風呂
場におりぬ

若楓葉裏にたもつ露ひと一つひとつひかれりひと
つその球たま

芽ぶき木の上に鳶舞ふ朝晴れて向山むかひやまのその後あと
山の雪

信濃路の假のやどりに日を數へ山葵の花を葉
ながらゆでぬ

蓮華草この邊にもとさがし來て犀川岸の下田
降りつ

げんげん田もとめて行けば幾筋も引く水あり
て流に映る

おほどかに日のてりか
げるげんげん田花をつ
むにもあらず女兒ら

さきだつは姉か蓮華の田に降りてか行きかく
行く十歳下三人

男の兒魚籃のかじかをつまみあげわれに見せ
けりものもいはずに

ほかの兒ものぞきをりしがたらまち忽に蓮華花田のむ
かうへ走る

蓮華草の花田に空の日はみなぎり鳶飛ぶかげ
をま上うへよりうつす

蓮華草咲く花ざかりまむかうのあを空ひろく
つづく山山

げんげんの花田見て來し夕暮をつかれてをり
ぬ強き入つ日

朝汁あさじゆにうかぶ青菜あざなに一花ひさの莖はなが箸はしのさきにか
かりし

汁のみに莖がまじりいでたるにわが腰痛こむぎみし
ばし忘れぬ

たけなはの春の日なかに出てありく街裏どほ
り牡丹咲く家

犀川のひろき川原に二羽鴉飛び立つと見て見
うしなひけり

犀川の川原白石日はきらつき雨後の若葉のむ
かう岸山

犀川の堤に立てば向う寄よりに水おのづから流れ
ゆくなり

雨あがり野蔭ひろがる葉の隙すきに莖立ながさき
んぼうげの花

葦切あしきりの飛び移り鳴く聲きけばわが子らいかに
くらしをるらむ

内 鑑

三月二十五日會染村字内鑑に移る、畠中の家なり、
三間あり、西に山山を見て眺望よし

山躑躅牡丹の花とむきあひに咲ける門かきべよ中
庭の見ゆ

木に草によせ植こゑて春の花盛心あかるくわれ
に居まれとや

この春はむなしく經しを山國におそく咲きた
る 苧環の花

杉苔のふくらむ庭の組石に枝さしかかり木蓮
のはな

つくり庭苔のふるびのおちつきて石はむきあ
ひ木は木とならぶ

川砂を敷きならしある庭前に暮滯む春の入日
惜めり

櫻草此處に花咲き老の身の山國住を待ちけむ
ごとし

櫻草此處にも咲けり山かこむ信濃に來しと告
げやらましを

櫻草ながの年月つかへてし殿こののみ庭の茅根かやねに
咲きき

鉢植の變種あまたのさくらさう見めでし父よ
六十年前

移り來て夕ゆふさびしみ膝行ひざりいづるはしるにきけ
ば斑鳩いぶらぎのこゑ

蓮華草すきかへしたるままの田は土塗れなる
花を残りせり

畠のものおぎのりに來つ夏葱をつくる傍のは
まなすの花

畠土に赤紫蘇の芽の出でそめし場所をぐらし
日のとどかねば

廿年前よりの知己青木壽籬氏來訪

その頃はいたくも肥こえてをられしと舊知の友
にいたはられつつ

障子ぎは机によればかしましく塀かきの外とが田がの蛙
が鳴きぬ

田の中に住めば晝夜のわかちなく耳もとさら
ず鳴く蛙ども

住みつきてまこと閑かにきくまでのわれなぐ
さめよ小田の蛙ら

西山のふとき蕨を一昨日も今日ももらへりち
がふ人より

鶯高く鳴きて朝靄うすれゆく鋤田見て來つ今
朝しばらくは

菜の花は莢の實になり花大根おくれで咲けり
ほかのもの未だ

藁屋根の庇にふきし家家の蓬菖蒲は魔除なり
とて

女手に赤駒つかひ田を鋤きて一人をりしが助
に来ざりき

齒朶むらのまだこはばらぬ嫩色わかいろに杉生もり來
る朝の日さしぬ

かりそめの病に臥せば松の花散らす雀の羽音
のきこゆ

米庫こめくらの屋根のおほひの板い茸ぶきの間あひだすきたり雀巢
をくふ

なき百穂齋伯筆

むら雀松の花くき飛びかふをゑがき遺ししそ
の繪をおもふ

うるさき父の軒といひしかど一間に親子よく
眠るなり

夏
日

郭公たけなすの庭樹にわぎに鳴くをめづらしみ見むとし思ふ
ところ馴れねば

郭公は晝とゆふべと庭の木に來りて聲を惜ま
ず鳴きき

時鳥ほくららすまだきかずやととはれても嘘うそはいはれず
ききたかりけり

薄井ひがし氏の東裏山ひがしに時鳥よく鳴くといふわれも
ききたし

住みなれぬ片山里の寢覺には時鳥すら聲をを
しむか

わかき女の身なるに

越の海柏崎よりあひに來て信濃の雨の一日ひとひを
かたる

弟ちとうてと笹の葉とりに山に行き粽ちまきつくりし土産物みやげ
ばなし

笹の葉をとりに行きしに聲かけられ今年も粽
つくれるのかと

ここへ来る一里あまりの田のへりを近路といへばまた歸り行く

遠く來し人歸り行き夜になれば雨の音しげしつゆに入りにけむ

田に降りてわく木まろがし苗植の下ばたらきに働く一人

早苗女は列を揃へて植ゑはじめおなじはたら
き一つに進む

苗代ののこりくづして苗束をつくり急げり日
の暮れぬとに

田のわきの刈草株にひかれども飛べぬ螢のと
きまだ早し

片側の鯉子こひこの池へ初螢ひとつ消えけり
苗植田から

井の端のすすぎををへし宵くらがり螢みつけ
て孫をよぶ聲

苗田づらすする風吹き眼のさきを螢よぎれり
今宵の暗さ

尾張十四山村よりして

早く寐ねにつきしに來きたる人の聲前田君かと卧か所ど
にていふ

遠來つる友とかたらひ早苗田を行このけば木間まに
いかるがの鳴く

郷社きやうしゃ杉の木間に斑鳩きんぎよの聲のひびくはよき今日
の晴はれ

この郷さきに範のりを示すと田におりて苗を植ゑをり
壯年まかりびこ者君は

田の畦にいこひてむすびわかち食ひ君の田植
にあへらくうれし

このさとに遠くたづねて來し友と田植の後あきの
雨にかたりあふ

移り住むわれを見に來しまめ人を三夜さとめ
けり梅雨冷曇つゆあせぐもり

すこやかに日をおくれといひのこし自轉車
借りて歸り行けりし

をさな子の跣はだしありきに庭さきの常夏ふむなひ
とりありきに

三日月の立てる宵かもななめ松しげき枝葉を
とほすひくさに

鼠出てねられぬ夜半の枕もと燈火あかりともせば雨
のふる音

夕されば紫露むらさきつゆ草花くさな閉ぢて明日の朝目をうなが
すらしも

刈つめし圓葉まきづくりの黄楊つげの木にめでたぬ花
のしみらに咲きぬ

花咲けど枝えだこちこちの黄楊つげの木をうるほひな
しと見る老眼らうがんに

持ちきたり貝死かいしなぬうちと汁じゆにするわが子み
やげの千葉ちぢばの蛤かき

來^こむ夏はわが手につくり花も見む莢豌豆の莢
のたべごろ

青麥の穂並ののびの直立^{ちかた}にそよ風吹けり窓あ
けてあり

傍^{わき}窓^{まき}をあけて穂立の青麥を日にいくたびも見
ニた^たのしみ

ききとめてその名を友の間ひたりし斑鳩はふるき鳥にぞありける

斑鳩のけふもしみらに鳴くなべに歸りし友のたより待たるる

日の暮のせまりてなほも風當のつよき木群に
寝鳥鳴きつつ

朝山の峯にも尾にも湧く雲のゆたかに人の移り住みけむ

雲の影畦の木の影うつりゐる水田梅雨照夕さりけり

軒近き柿の木若葉くれのこるほのかあかりにはしるせりけり

東京の町中にても眞晝間に蛙が鳴くとわが子
來ていふ

醍醐寺不動明王圖藁

海中の一つ大岩に劍つきたて背後いごの火焰くわん燃ゆ
るまにまに

不動智の不動明王はびこれる倭人ばらをにら
みつけたまふ

恭うやうやしく崇あがめたてまつる尊像は千歳かくもか寂
然不動

人間の善惡邪正認にん諾だくの不動智なれや嚴いかしみます
がた

白描はくぼうの不動明王に魂をうちこみおきしよ信無
阿闍梨は

梅雨つゆの雨あめゆふべ降りいでつ早苗田はやなへのむかうの
家の牛うしのながなき

手習てならひをしてつかれたる夕窓ゆふまどに麥むぎの穂ほぬらし雨
ふりいでぬ

降りいづる雨あめにくれゆくほのあかり生垣なまがき低ひし
前家まへやの白壁しろかべ

朝ざらひ雨あがりぎは笠かぶり田におりて苗
を見る人のあり

えにしだの花の盛のきらきら日び水田の面かほは泡
ふきにけり

梅つ雨ゆどきの雨やみてなほしぶり照麥あかりが徐そろ徐そろ色
づきゆくも

こでまりの咲きてたわわになびくにぞもとの
わが家の庭眼にうかぶ

夕庭にこでまりの花咲きそめてそよゆれつつ
も暗みゆくなり

けふもまた一日くもらむ朝じめり納屋なやの傍わきな
る栗の花咲く

今よりは人手なければおぼつかなわが子が肥こえ
をくみ擔にまふなり

かどにいでてとりし螢を葱の葉の筒に透すかして
孫のよろこぶ

人も來ずさびしき時に出いだし見よとわが子はこ
びし江戸名所圖會

武藏野のすすきしげりて露降りしおもひでい
かにかはりはてけむ

生國の土となるべくおもへりし事のたがひて
老おいさまよひぬ

鯉の子の一萬二萬と國國にわかたれゆけり此
處の池より

梅雨晴の軒に來て鳴く雀の子おやを離るる子
をばよぶおや

色づきし麥穂をあらす雀らの子をよぶ聲はき
きにくくなし

日を受けし西の山山夏雲のけきはさやかにわ
れさへをりぬ

窓あけてあるに入日の残光のこりさす疊たたみみつめてし
ばしねころぶ

溝川の岸の草むら鼓子花ひるがほの一つ咲けるが葦よしに
からめり

しもつけの花の長房鬼齒朶のひろがれる葉の
かさなりの上うへに

しもつけの赤綿の花咲きおもり立葉反葉の齒
朶に映れり

しもつけの花寄せ植ゑてあるかげに木賊四五
本まじるが青し

あの鳥は何といふ鳥青嵐ゆふべに吹きて雨を
はこべり

胡瓜蔓のびて花咲き南かほ瓜ちや蔓のびて花咲きおな
じはたけに

雲切れのひまもり照らすいりつ日に夕ゆふ靄もやしづ
む山山のいろ

山國のひゆるは夏になりてなほ着物も更かへず
七月八日

なくてはと洗濯盥うそぎを運はらひばせてたまはる夏のま
だひえにけり

納屋の子に雀くはへてゆく猫と子をばとられ
て鳴ける雀と

麥むぎ扱あきに人人はたらき燃屑もえくずの烟いぶりぬ傍わらわをと
ほれば

倉壁に麥かけつらねつるしある前過ぎて行く
隣の村へ

のびそろふむらさき紫蘇の色濃くて暑くなる
べき日があたり來つ

日のかげる蔭かげのしげみによしぼそのながき穂
なびく淡ちほ淡あふしけれ

うつば草咲く田のわきの夏草を朝夕に見てゆ
ききに馴れぬ

添そへ竹たけに十六ささげからまりてまだ伸びながら
花の咲く時

いかり草はや盛過ぎうつろふにいつまでも濃
きしもつけの花

椋鳥は杜の木このま間にむらがりて鳴きしが往いにき
夕日残れり

栗の花咲けるかどへに人居らず雨の近づく山
山ぐもり

武井文雄氏宅にやどる

雨になる今宵良寛遺墨集ひとりひらきぬ友の
家にて

おのづから筆のはこびにあらはるる良寛僧に
今宵しも遇ふ

手蹟てに歌にたとへばものをとりいだしならべ
見さするあつかひのごと

雨あめの後あと水みづ嵩かさ高き高瀬川山のゆきしろ今おろし
來くる

つばくらに雲立ち迷ひ高瀬川おし流し來る水
のいきほひ

雨霧^はるる今朝水嵩^{かさ}増す高瀬川てすり傾^{かた}むく木
の橋長し

雨の音こよひもききて眠らむにねむりに入れ
ば今を離れつ

遠山のうしろの空にくれて後ものちも明るくもの
あいろ残り

朝窓をあけねば暗しふりいでて南瓜の廣葉打
つ雨のおと

朝雨のふりいでて杜に鳴く鳥のさわがしかり
し一時ひととき過ぎぬ

さしかくる柄長傘松張枝に來鳴くいかるが雨
に逃げたり

けふもまた雨の一日のこもり居に南瓜の花の
土に落つる見む

夜くだちの雨をば避きて土廂どびらの下の敷砂に螢
ひかれり

永年の月日のうちにふくかびの墨のふるびはぬ
ぐひあへぬかも

伊藤信太郎氏來る

片よりの山里住に遙はろ遙はろと友たづね來て心なぐ
さむ

歸り行く君のうしろを見おくれば青田日くれ
て人どほりなし

白露の朝朝しげきくさむらに蚊帳吊草の穂が
すいと立つ

夕炊待つ間を孫と外に出で草蜉蝣をくさむら
に捕る

草庭の桔梗の花は正午まではつぼみなりしが
一つ咲きけり

梅漬は竹の箸にてかきまぜな木の箸つかへか
びふせぐには

をしへられ梅漬つける老妻おづまのたどたどしさよ
馴れぬしぐさは

鯛は遠くにきこゆ歸る子をどこまで妻のおく
りて行きし

野 萩

歌會の日武井氏折りたばね來つる萩いと美し

信濃路は山の狭霧のふりそそぐ林のさきの早
萩のはな

本疎もその丸葉あはの萩のなびき枝えの花はしみみに咲
き開きたり

山國の季節の遅きに萩の花盛を見れば夏なかりけり

西山の裾の林の路過ぎてわがため萩の花手折り來し

今日の日の來るみちにして萩の花手折りかざしつ風雅士君は

三薦
苳信濃の人はみやびなるふるまひ知りき
萩の花づと

先萩さきはぎの咲はける垂枝たれえだの花重おもりなびきやますも散
らまくは惜し

野の風に夏咲く萩のふし靡なき散りかふ時にわ
れをいぎなへ

萩は水あげむつかしとききしが

かりそめにいけしが水をよくあげていきほひ
づけり野萩なればか

三日過ぎて後、武井氏につれられて

みちせばきしもとまじりの萩咲けば小松林に
ふみ入りにけり

つとにせし萩は此處にとみちびかれ松の林の
下わけいりつ

野の萩を見にときたりし荒野には女郎花あり
撫子のあり

野の萩は手折りたばねて美しさはじめて知ら
ゆ枝しどろなる

凌霄花

一日を机によりて腰痛むつかれに立てば百日
草のはな

貰ひきて孫植ゑたりし窓前まどさきの百日草の花は赤
しも

けさひらく芙蓉の花にとまりたる赤蜻蛉はま
だめづらしき

花咲くを待ちし木権むくけの咲く見れば一色ひさいろなりき
白はなかりき

咲き開く二重ふたへ桔梗ききやうは人技ひとわざにまさるたくみの見
のあかぬかも

咲きつづき日をたもつ間に菊芋の花は重りて
枝折なしつ

四郎氏滞在八日

兄弟の會ひてぞ語る少年の記憶すくなきさび
しさのうち

井の端の木に凌霄花の咲くを見てともによる
こぶ老の兄弟

凌^{のう}霄^{げん}花は日にけに咲けり繪にかきてのこして
をゆけまた來むは何^い時^つ

夕立の降^{かり}の強きにけぶらひしあたりの田畠見
えそめて來つ

夕立はものを洗へり稻の穂のぬれひたりたる
田づらつづくも

朝旦あさな見し草花の數減へりて露のつめたく紫苑むらさき咲
きけり

孫萩原重雄

九月七日信雄より兄重雄八月八日戦死の電報に
接す、細事未だ知り得すと云々

一枚の葉書手に持ち見つめゐてあな息づかし
重雄死にたり

戦死せし一月後の今日知るをうとかりけりと
思ひ悔いめや

長男に生れし汝なれのよく肥こえて大おほ様やうなりき若わかく
死なむとは

筑波ねにつれて登りし思おも出ひでの今あらたなり死
にて居らずも

世にいでて妻めとる迄までわが生きてゐたしとい
ひし事のたがひぬ

汝なが死にし事は知りなきいづこにていかなるときに命はてけむ

八日風吹けり、二百二十日前とて荒もやうなり

一ひご月の前つぎの八日はけふのごと風の吹く日のくもりなりけむ

この世にしあらぬを思ひかけざりし一ひご月のあ
と追ひひて嘆かふ

汝もこの畠の中の起臥を知らざりけりと窓あ
けにけり

訪ひ來むにわが文机の横にゐてくつろぎたら
む汝のおもかげ

おほやうに育ちし汝を死なしめて馴れぬ田舎
に老人の起き臥す

深夜杜をとよもして大風やます。縁に立ちて暗
きが方、をうちまもれども何ものありとしもな
し。ことばこそかはされね、せめてはおもかげ
をだに見るよしもがなと、ふしどに入れどねむ
りがたくて

杜の木をとよもす風のおろしくる暗き夜ふけ
に誰も來はせぬ

風の吹く闇の夜ふけのつねならぬ外に立たず
やと眠れざりけり

おもかげの見ゆべくもなき眞しんの闇高木をおろ
すさ夜なかの風

汝いましもよ若きさかりを死にゆきてさかしま事の
嘆なげきをぞ

今迄に一人も缺けず在り經しが孫戰死して心
まどひぬ

十一日母親よりこまごまとしらせ來れり

母親はあきらめかねつ終戦後歸りて來る兵の
あるごとに

終戦の今日此頃のなげきゆるなほあきらめの
つかすともいふ

孫重雄八月八日戦死すとわれいくたびも口の
うちに唱ふ

秋に入る

秋に入る雨のにはかに冷えまさりしづむこの
夜の虫のねをきく

間引菜の大根だいこんの葉の蟲痕むしあとは一昨日をこひきの昨日きのふ雨のつ
づきし

雨風のをさまるらしく和なごやかに日のさしくれ
ば外そとにいでてみむ

信濃路は西にむかへりこの朝あした桔梗ききやうの花に雨の
寒しも

雨のふりけふの晝間の寒けきに百日草の花を
見てをり

伏菴を人訪ひ來ねば夜晝のわかちを知らに馬
追鳴くも

露むすぶけさの外出そとでに眼前めまへの穂草をとりてわ
れに教へよ

むかし人莎草かやつりぐさと桔梗とをとりませたれば秋の
寂さびしみ

秋草の咲き競へるにまじりては吾亦紅もまた
花のひとつや

ひろごりて咲ける紫苑の直立のうしろにはな
ほ高き穂芒

雨のふる夜のたたみの濕れるに蝶蛄這ひいで
て隅にかくれぬ

子規忌

赤き林檎青き林檎と口すきみ信濃林檎を供へ
まつりぬ

先生の遺墨の前に供へたる青き林檎は秋を淺
みか

くさむらにあぶらすすきの穂は折れて昨夜の
嵐の後風吹くも

遠空に白馬の雪のさやけきにこよひの月を人
かたりあふ

島中にそよぎて青き砂糖黍こよひ十五夜さや
けかるらむ

ひとところ秋蕎麥の花今さかり望もちのこよひの
月の出での前

早刈の稻をくりやの入口にたばねてありぬ日
暮とほれば

昨夜われはかへり急ぎて月のいでしうしろの
山を見ざりけるかも

雨の後ぬれひたりたる庭前の紫苑の花のうつ
ろへる見む

わが心なぐさまなくに木犀の花の香もがも雨
さへぞ降る

雨やみし雨間あまの空に日暮のほのあかりありて
遠山の見ゆ

稻がけに稻かけつらねいちはやき刈田の株に
雨ふりそそぐ

よくも降る雨ぞとひとりごといひて早寝をす
れば家人笑ふ

片言をいひてはわれの側によりとんびのまね
のびいしよつしよつしよ

山の上平に漂ふ雲のなく有明山のおだやかに
あらな

したしみは間近くにあり眼前めまへの有明山は見馴
れたりけり

ゆで栗をもらひて歸り來くるみちによるこぶ孫
の顔がうかぶも

ひもじさをこらへてくらす人のあるに田舎に
住めば孫はふとりぬ

たきたての塩のむすびを二つづつ今年の新しんの
雪白の米

霜にあひて柿の落葉の積れるを井の端はたに出で
てけさはふむなり

一ひらの葉をとどめずに冬を越す柿何本もこ
の家やかこめり

消ぬがうへに今年の雪のふりつもり山の白さは
日日に増すべし

詹裏のきうらに巢うらごもり蜂の巢のあるを孫ぞをしふる
雨のふる日に

山國の雨の寒けき窓べにて子規全集の年譜を
書き抜く

蜂は巢に雞トリはねぐらに雨降あめふりの日ねもす寒し炬
燵あけたし

里山邊温泉

かくしこそ人より來くなれ人肌ひとがはだに二度ひくしと
ふ湯にききめあり

身の病なほさむ人は黙もく黙もくとまなこをとぢてい
でゆにひたる

雨の降り暗き浴室ゆかは人なくてわがしはぶきの
ひびきこもりぬ

秋の雨ふりのつよくて温泉ゆ宿やどの渡廊わたり下に足裏あしうら
ぬらせり

夜を寒みめざめてをれば野猫のらねこの嗶聲しはがれこゑに近づき
過ぎぬ

朝の日のまだとどかぬに霧がくり稻刈る人の
たちはたらけり

綿ならばつばなかさべしほほけたる茅花つはなを見
れば綿のごとしも

家のうちあたたまらねばさむしろを敷きて日
なたに孫遊ばせつ

紅蔦べにづたの土を這へるは小形の葉樹にまつはりて
濃きは大形

西風の寒きに友は稻あげに出でてもどりのく
らくなるまで

井の端に落つれば拾ふ榎くわ櫃びの實數のたまるは
うれしきものを

霜ふれば落つるをいそぐ柿紅葉梢にのこれ染
めて赤き葉

稻刈りし後の田川は用なきが如き流のすみや
かさはも

里時雨

このさとに時雨ふるなりこもり居の老おいを訪ひ
來る人待ちをれば

茅屋かや根ねにそそぐ時雨の夜に入りてふりつ
ゆくただ雨の音

雨のふり來るかと惑まどふ風の音殘る木葉をゆり
拂ふらし

夕鳥のさわぐが中に聲とほり小鳥らしくてま
じりてきこゆ

ねどころにつくにかあらむ杜の木にゆふべに
なれば鳥あつまりぬ

時雨ぞら友がり來ては門かどに立ちさかはやし帘見つ蕪村の
一句

「帘軒れんけんにとしふる時雨」ぞらおとなふさきにあ
ふぎ見あげつ

人のいふままに見むけばまる圓き月東の山を今し
のぼれり

正ま面まへにあらはれにけり山やま峽がひの月はいましもい
でたるばかり

あふぎ見る山また山の峠路の高きところに月
はのぼりぬ

爪つめのびて病人やまびとさびぬつかひよきつめとり鉄も
たまほしけれ

收こ穫りのすみし冬田に日があたりおちつく處ところに
おちつきにけり

直す直すと美み濃の早わ生せ大だ根こ土こをあげてそだちよけれ
ば引く日近づく

土つち大おほ根ね土の上へと根をあげていきほひづけば
冬は來向かふ

黄に染まる草三株ほど暮残りあかるかりけり
時雨ふりつつ

ふりやまぬゆふべに倦みて窓あけても眼に見
えぬかも土にしむ雨

この夜頃燈火あかりを消せばおちつけぬ癖つきにけ
り寒さの強く

重雄遺骨公葬日

眼前めまに時雨降るなり東京の今日の天氣を氣づ
かひをれば

おもふにしまかせざりけり生いき死しにの別わかれにすらも
つらなりがたし

流らふる時雨の雨はわが嘆く孫のはふりの日
ねもす止まず

雪

この里に雪ふりにけりはじめての信濃の冬に
こもり住むべく

この冬を心がかりといふ友に雪ふりけりとま
づ告げやらむ

雪の來るおそしと思ひし前山に二筋白く今朝
流れたり

後山あとやまの雪日を受けてきはやかに前の山との距た
離たり知らゆ

あづかりし手紙もたせてとどけしに雪もよひ
にも外出せり君

雪の日の一間あかるき張壁にかけかへて見む
とおもふ繪もなし

雪霽れて日のまかがやく時をおかず杜の高木
の松風きこゆ

雪積みてつづく田畠の月つきあがり明杜のかげなる伏屋
に居れば

月照らす地上の雪の雪霏ゆきが空につづきて立ち
こめにけり

積むが上にまた降る雪を降るごとに見ては馴
れゆく畠中の家

縣道けんどうの見ゆるはづれの曲まがりまで雪ふり積みてけ
さ霽はられにけり

山越の風のはこびて散る雪にゆふべひつ一時とき日の
さしたりし

雪の中に年のはじめをむかへむにあひにわが
子の女めの子は來べし

いささかのゆるびに力づく今宵今年の日數三
日残り

山おろす風あて強き松の下もと藁屋の二間ふた西まに向
きたり

静けさにをらばやと思ふ夕暮に杜をとよもす
こがらしの風

畠中の杜をゆりつつ風の吹く冬のゆふべはた
だただ一人ひと

この雪はあらたに年をむかへても下解し、つ
つ消えのこるらむ

雪の日に幼き孫が持ち出せば涙ぐましき江戸
名所圖繪

わが如に嘆く日あらむ孫抱きて炬燵に雪のゆ
ふべを居りぬ

心あてに待ちしわが子の來りしに年越の夜の
淺蜷貝の汁

年越のくりやあかあか薪くべて煮にもの急ぎぬ
雪はふりいづ

此處よりも雪高しとふ新潟の來迎寺にてくら
す子もあり

山國の友は八貫俵の炭わがためはこぶ師走つ
ごもり

夜あけ待ち雪の田みちを來し吾子の聲こそす
なれ大晦日けふは

背負ひこし貝の蛤しほふきを雪ふる窓の下に
ひろげつ

端^はさし
あし
かり色の
あ
り
た
も
て
り
た
が
ふ
雪
の
う
へ
に
ゆ
ふ
べ
端^は

新年

ここにしてみかへし年の初日影われ正まさしくも
七十なほそぢの叟をぢ

七十なほそぢのよはひかさねてむかへつる年の初日は
高山のうへ

山國の信濃の人とよばるべくわれ七十の年を
むかへき

みやこより移り住みては七種ななぐさの薺なづな摘まむに雪
のつもれり

雪積みみていく日もとけず新年は寒に入るべく
凍み強つよくして

日のさしていくらか雪の解けゆけば七種粥がゆの
青齋あをなうなもが

新しき年の七日の齋粥にたちて釜をふきあふ
れたり

涌水ゆきみづの浅井くみあげたちかへる年のはじめを
われ若やぎぬ

雪積るあたりの景色朝日さすけさ井の端に松
立てにけり

涌水の底すきとほる井のなかをのぞきて年の
はじめをいはふ

ことほぎて水汲みあぐる井の向う雪の山山朝
日にほへり

寒けれどすがすがしけれ井の端にいでてこと
しの若水汲めば

わがやどの窓をあくれば信濃富士信濃に住み
て新年むかふ

四方かこむ山の白雪朝日うけてかがやかしけ
れとしのはじめは

門かに結ゆふ松も軒端のしめ繩も信濃の風俗てぶりした
しかりけり

雪の中うに年立ちにけり去年このまま残るがうへ
に降り積らむに

友の來て炬燵に顔をよせあはせうはべつくら
すまづ新年は

君たちの血氣けきざかりにあやかあかりてととし一年
若わかゆべくこそ

田の傍わきの井淺くして汲み易き水をこぼせばす
ぐこほりつく

朝日さすけさは厨くりやの廂ひまし先氷柱つらちさがれり雪解の
して

厨戸の廂に垂るる長氷柱朝日のさすに美しく
見ゆ

雪どけの軒の玉水音算みてとしほぎ酒に晝間
酔ひにき

遠くへのかへりにわれをおくりつけてまた行
きにけり雪のふる夜を

信濃よきところとおもふ移り來て心誠實なる
友の情に

畠土はこほりつきたれ田川なる芹一つかみ孫
よとり來よ

ちる雪は風のはこべり澄みとほる田川にまだ
き芹の生ふるに

裾あげて田の小流ながれに片洗ふおうなはわれの年齢としい
くつうへ

そらの月さやかなれども雪の上にとどく光は
いや遠にし

そらの月地つづみに積む雪この夜半よなを照らし合あせて
更けわたるかも

張りつめし氷の下の水の音落窪ありてひびき
立てたり

こほり張る田川にかけし石橋の下に落ち込む
水音ひびく

薄氷の張れる田川の岸くづれ朝かげさむし日
のあたらねば

杜

松杉のふりてのび立つふと幹を口ごとにぞ見
る老おいの住家に

老松の高きのび枝船形ふねがたに積つもれる雪を載のせて
落さす

雪の朝窓のむかひの杜の樹に高くななめの松
の張枝

葉をふりし木木立ちまじり杜透きて有明山を
この窓に見る

山國のならひ晝過ぎ風の出て杜の木群をゆり
とよもすも

吹きおろし來る雪山の風の音わが居る杜をと
ほりて過ぎぬ

山風の吹きあててゆする杜の蔭かげわが家の窓に
夕日うつれり

なげくにもあらずもとよりなぐさむにあらず
高山をふきおろす風

ここにして老をおくらむ
伏ふせ庵いほに松のあらしを
厭ふ日もあり

風つよくふく日は友も訪ひ來ねば
たまる手紙の返事をかかむ

ふりそそぐ雨ふりつ
のる黄たそ昏がれの雪になるべく
凍しみのしるしも

淺川の根白の田芹洗ひすすぎすがしと思ひ寒
さ忘れつ

山ざとにあさりのむきみ飯いひにたきうからの夕ゆふ
食けにぎはひにけり

寒の中の雨はまことにしづかなる音をたてけ
りまだ宵なるに

冬川のすめるながれの落口おちぐちに水草青く浮うかびた
だよふ

またも降りいでにけるかもこまか雪積るをい
そぐ夜はふけんとす

ものの音けふなかりしがたそがれの雪ふる簷のき
に雀鳴く聲

をやみなき雪に日くるる軒裏に雀かさこそひ
もじくてなく

ふり積る雪のゆふべは生垣の外そとのこみちの人
どほりなし

塩おしのこほる漬菜をきりきざみませし湯づ
けの山里さびつ

たくはへて惜める海^つ 苔^りは山住の雪に訪ひ來む
客人^{まねびと}のため

雪積^つめば田も畠も間^まの溝川も一つづきの眺^{ながめ}
になりぬ

遠^{とほ}くより手紙來^{きた}るをくりかへし讀みて慰^{なぐさ}む雪
解^との窓

東京の芝居筋書おくり來る人もありけりこの
片里かたざとに

一ト月の前に來し子を待ちかねていく度たびもお
なじかこち言いいふ

月立てどいまだ冬なりこほりつく雪は立木の
幹の片側

夕月の落ちし後にも一色にしづむ白さに雪は
見えけり

積雪のこほる外面にかかはりのなくてこの夜
の更けゆきにけり

わが子來るこの夜の汽車のいくらかは凍のゆ
るむをよろこびあひぬ

夜ふけては家居のあかり消えてなき雪みちを
來む吾子待たるれ

雪つもり馴れぬ信濃の朝夕をいかにしのぐと
友はいふなり

來とならばむかへに行くと重ねての友の手紙
を妻に手渡す

紅
梅

十四山村よりの小包とどく

鉛筆の長さほどなる紅梅の枝に
ともしき蕾を
數ふ

紅梅の花の小枝を雪のふるけふ
見てをりぬひ
とり炬燵に

信濃路の雪の中にはまだ咲かぬ花をし見よと
紅梅の枝

枝先の分れ約りて古りし樹の梅の蕾の冬閑なり

綻びてはつかに赤き蕾もつ梅の小枝を見つつ
楽しむ

紅梅の小枝のつぼみ綻びていろ見ゆれども開
くには目あり

紅梅の花の頃にしおもひいづる大和の國はも
とのままか今も

杜の木の鴉のむれは飛び立ちしがまたいつの
まにか戻り來て鳴く

風すさぶ西向窓にくわつと日の明るくさして
忽落たちまちちぬ

このいく日凍みつよければ硯石日向の縁えんに今
日出ふだして置く

三
月

わが友がお伊勢まるりの月講に加はり行きて
途中雪にあふ

伊勢まるりのみやげに貰ふ着色獨樂の二つは
二人の孫が奪はむ

手すさびに老も子供の遊びわざ獨樂をまはし
てほかごころなし

獨樂二つならべまはしていづれ先いづれ後な
る獨樂のいのちの

日一日いちにちふりつつ消ゆる春の雪獨樂をもらひて
廻しみて居り

牛の乳ちちのしぼりたてゆるゆる飲のめよとて持もち來こら
ねたり孫とわけあふ

雪解ゆきとの明あるきゆふべ急いそ足あしにたどん置おき行いくま
はりみちして

誕生日

ふりみだる雪にきほひてみちを行く子どもの
聲はわが孫を呼ぶ

少年は雪のふるにぞ日曜のけふも朝より外そとに
出でて呼よぶ

ふりしきり積りて晝に晴れたりし雪をすがし
むわが誕生日

七十ななそちのわが誕生日雪積みて解けもこそすれ春
和なごやかに

老いてなほ先のいのちを頼みての安けくもを
れば春の雪ふる

七十ななそちの老おいの坂さか越こえつく杖つゑにながく直なほきを祝ほぎて
たまはれ

七十のいのち重ねて山國やまくにに雪ゆきのふる日ひをおの
れことほぐ

いそがしき中なかくりあはせたづさへて來こし養命やうめい
酒さけたくはへの酒さけ

老らくのいのちやしなふ酒飲めば心樂しく今
日は居らなむ

雪霽れてわが誕生日しづかなるゆふべとおも
ふ君も一つ酌め

雪
解

雪^{ゆき}解^{とけ}の軒^{のき}先^{さき}つたひ落^おつる水^{みづ}下^{した}の窪^{くぼ}みにたまり
あふれぬ

雪^{ゆき}解^{とけ}の水^{みづ}のたまりの濁^{にご}らねば浸^{ひた}れる小草^{ひこ}一株^{かず}
青^{あお}し

むら消きの雪間の麥の畠はたけ見みに明日あすの朝あ出でて路か角さ
まで行かむ

雪の後あとの日ひざしのどかになりぬれば幼わき孫まごと
ひる窓まどの下した

露つゆの臺たいほりて小鉢こわくに植うゑもせば都みやこにありし日ひ
のごとくあらむ

三月になりたりこそぞの雪ふりにわが病得し時
めぐり來ぬ

雪間草もえいづるべくゆるみしが三月の凍しみま
たもつづけり

朝窓に雀囀り和ましき日ざしにもまだ見る花
はなし

象山のをりし松代焼の壺貫もらひはしたれ梅はま
だ固し

この國のものとしてめづれ壺古りて青がけぐす
りおちつきにけり

そのかみにをりける人をかたりあひ松代焼の
壺は見飽かぬ

ふるびつく小形片口水入になして硯のかたへ
におきつ

いくらかはをさまるらしき百日咳こよひは孫
のいびきを立てつ

馬醉木

小包をひらけば

雪をふきちらす山風止まなくに馬酔木の花は
枯れずとどきぬ

口切りし赤き蕾を二つづつ持てる小枝の寒咲
椿

さんしゆゆはこの三四年見ざりしが小枝爪折
おくり來にける。

ねこ柳まだふくらみの足らぬまの春穉くして
見るに寒しも

凍みすこしゆるむに孫は元氣よく唄をうたへ
りわけわからぬうたを

こほらせてここにはこびし公魚わかきはいづこに行
かばとれるかとさく

公魚とほかの小魚こぎかなまぜまぜにこほらせたるは
いづこよりか來くる

老妻は雪の越路におもむきしがいかなる魚を
食たべてをるならむ

山國に住む老の身は公魚の氷づけをばつづけ
買はせし

冬がこひせねば青物何もなき此頃食^たべむ物に
つまりつ

冬はまづ葱^{ねぎ}をたくはへおくべしともしき葱
を煮ても汁にも

「上代の彫刻」奈良の佛像をばけふ見たりしを
夜おもひうかべつ

しあはせのわるくて孫を二人つれこの先なが
くひとりくらすか

背も腰も痛まぬこよひのびのびと足そろへた
り寢釋迦のすがた

いとけなき孫抱きかかへもりしつつ後十年を
いきのびてゐたし

嘆きてもかひなきことはおもはずに明日はけ
さより早めに起きむ

桂川 萃果園

家主あるじ人折たく柴の火うつりをこよひ湯風呂に
ひたりつつきく

朝曇雨ふりいでつ池水に汀の雪のうつりてを
るに

平福一郎氏嘉治隆一氏來訪

なき友のことづてもきくおもひにてかかる僻
地に二人來ませし

なき友のまな子來れり鞍くら鹿しかのもてなしをせむ
折もよき折

鞍くら鹿しかを汁じゆに煮につけにまれ人とわれはじめての
肉ししを食くべあふ

をさな子は雨あめのふる日の家いへごもり祖おほ父ちちの守もりに
あきて母ははよぶ

雨あめ一ひと夜よ一日いちにちつづきてこぞよりの根ね雪ゆき消くえけり
三みつ月つき保たもちし

をさな子の機嫌とりかね食物を持ち出す祖父
は守すら出來ず

七十の老はをさなき子の守につかれて母をお
もひ出さしむ

いくらかはゆるむ彼岸の雨の日を孫とくらし
つ孫のとしは四つ

老づぎて衰へゆけばおもひやりもあるべきに
なほ固陋かたろうにして

妻 山國を遠く離れて海近く出養生する老のわが

幼な孫百日咳にこみあげて日にいくたびも苦
しがりけり

一年生の孫の見つけて川楊の枝折りそろへも
ちかへり來し

水ぬるむ田川の岸の猫やなぎほほけて人に知
られたりける

大雅堂

安禪毒龍圖

毒龍のおそひかかるも身じろがす三昧に入る
静寂の境

正定のありさま知らゆ毒龍の狙ふとすれど隙
をあたへず

三藐三菩提さんみょうさんぼだいかな修業してここにおちつく阿羅漢あらかん尊者

わがもとに一日ひさひあづかる繪掛物池の大雅の筆
たしかなり

墨うすく筆はぶきある羅漢像よくみてをれば
誰にやら似る

繪に名ある人の書をほめあぐる中に大雅堂を
ば必ずえらぶ

眼の前まへにかけてわれのみ一人みる奇くしき大雅
の筆のはこびを

繪に奇くしき譽ほまれのみかは蕪村の句大雅堂の書あ
はせたたへむ

雪消えて島の麥の根を踏みにめづらしがりて
孫の出で行く

片寄かたよりに有明山の山腹を照らす入日を風ぞゆり
ける

風荒れて近邊ちかへの山の裾雪はくほみくほみにか
たまりつきぬ

春寒き彼岸のあけの入つ日の光轉くろめき風つよく
吹く

枸く杞こもがも五う加こ木ぎもがもと待ちつけしたきま
ぜ飯をわれに食はしめ

蒲た公ほ英ほににがみは知れどそのにがみ久しく嚙
ますつみて來こ子こらよ

ゆきずりにとへば牛蒡ごぼうの種蒔くと畠はたけの人のお
もあげもせず

見いだしてそのまま明日あすにのこしおく畦の土
筆に雨ふりいでぬ

柳町小學校

校庭に咲ける三本の花杏はなあんず明日つれられて安茂
里に行かむ

安茂里の杏花を見る

名どころの安茂里に入ると橋一つ渡れば花の
杏のさかり

百年の前よりならむ一村の心あはせて杏を植
ゑぬ

山畑の桑の枝えだ株かぶわけのぼり杏の花の下にころ
ぶす

鳴く鳥は杏の花の枝うつりつぐみ鶉の聲の里馴れき
こゆ

一村は杏の花の咲くさかり雲と靡けり遠くよ
り見て

人にいはぬ心かかりの事ありてやすいしせぬ
にふくろが鳴くも

一年を過ぐればわれのさきにたち杜の櫻を見
い見といふ

土筆生ふる處ありやと求めしにわが家の裏に
かたまり出でぬ

見いだしてそのまま明日にのこしおく畦の土
筆に雨ふりいでぬ

梓

安曇にはありといふなる梓の木
いまだ見ざるに春めぐり來ぬ

梓の木此處に生へりと知る人に
いまだあはねば確ならずも

狭霧降る山に行かねばあるまじと梓を知らず
この國人も

黄葉もみぢする木に梓あり秋深き上高地にて見しと
人いふ

老おきなのつく杖にもがもな信濃人梓さがしてわれ
に得えしめよ

伊藤信太郎氏來る

山櫻咲きの撓なまりに土かへす田の縁よち行かむ君と
見るべく

此處に咲く堇の花の根を掘りて何の紀しるし念しに持
ちかへるらむ

垣内の畠の種菜の花莖のぬれおもりゆく雨ゆ
ふべなり

雨のふりくらくなりゆくしまらくを明日かへ
る君と面おもむかひをり

二日ゐてきのふも雨のふりたれば心のこして
かへるを送る

かし鳥の來鳴くといふはこここゝにゐて今日もわ
がきく懸かけ巢すのことか

咲き開く赤き牡丹の花びらの反まがのくるみを扇あふ
る風かも

芍薬のつぼみふくらむ數かず數かずがやや高くやや低
く揃へり

近くにて山芍薬の花咲かむところのあらばつ
れゆかれたし

蓮華草咲くそこかしこ鋤かぬ田のかなりあり、
けり手不足といふ

けふもまた蓮華の花を耕さねば徐に日は夕づ
きにけり

菜花も蓮華の花も見ず過ぎし年月のあとの今
はむなしき

ひとところ白き堇の花のみが咲くをも不審ふしんな
りとおもへり

白堇色きはやかに咲く見れば小草小花ぞあは
れなりける

田舎住なま薪た焚きてむせべども躑躅山吹花咲
くさかり

咲きあまる棠梨ごたじの花の一枝を都の人に見せて
やりたし

木曾に行きかつて高木を見たりしが此處こゝにも
咲けり棠梨の花時

二階の窓あくればすぐの眼め下したにしだり葉柳し
げりあひひにけり

東國あづま人びとここにきたりて復また生いきむしるしに植うゑ
む何の木かよけむ

八雲やうむ刺山しやんのつづきの高空をゆふべにあふぎ旅たび
人びとさびすも

伊那谷の新茶もらひて飲みしかばかつての行ゆき
を思ひいでつも

藪かげ

庭隅に斑葉あふひとひめ著莪とひまなく生ひ
て今著莪の花

おくれ咲く著莪一八の花見れば山里人は夏と
いふなり

みちのくま著 莪一八の花咲けば慰むに似て老
をはかなむ

藪かげの一八咲けり疾き遅き季節の移動に漏
るるものなし

隠遁を口にすべきにあらねども藪のしげみの
一八が咲く

藪かげにはひもとほれる通草あけびづる花咲きにけり
たぐりても見む

藪しほのみちひらくと拂はらふ楛しもこぶ生の通草のつるの花
萎しほれたり

藪かげに通草の花を見て立てば今日けふはそぞろ
に人のこほしき

若葉木の杜のかなたに山そびえ遠くは晴れて
近く曇れり

信濃にて食^たぶるに細き筍をめぐらしがりき今
は土地のもの

朝雲のわきあがる山の近ければ鶯の聲此^こ處^こま
できこゆ

雨の夜に墓ひきののどよぶせつなさも安らやすにきき
てわれはねむるも

ありがほしき住みがほしきは國がらか信濃安
曇の田に鳴く蛙

山國に住みてたまたま池鯉いのあぎとふ見れば
ゆたにあらましを

山國の人田におりる時おそく水つめたしとい
ふも幾日か

高瀬橋に出るとて

小林こはやしの松の漏日は下草のしげみにまじる菖蒲あやめ
の花に

つれだちし吾子わがこは草生に足ふみ入れ菖蒲あやめの花
の葉たばをつくりつ

草のたけいまだそろはぬ嫩色に映るむらさき
菖蒲の咲きぬ

今よりはともに居らむといふ吾子と菖蒲の花
の草生行きつつ

あやめ咲く青野が中の脇路を語りて行かむい
そがすもよし

夏をおぼゆ

忍冬の花 早咲きぬ 川寄のみちは 照日の光つよ
く

高瀬川 高き つつみに 水照の 日を受けて 咲く 忍
冬の花

野茨も 忍冬も 這ふ 石垣に 花かをり あふ 高瀬川
の上

初雷

山國の見聞みききのもの遅れがちに初雷はつらい鳴れり苗
田に降る雨

この頃の雨夜降りて朝やめば植ゑつけ稲のそ
だちゆくなり

雨^{あめ}あがり朝日あまねき青田づら近よりて見む
稻のそだちを

安曇野に常^{つね}喚^よびて棲^すむ鴉の聲この頃きくに雛
の巢立か

夏消えぬ雪の高山やや遠^{とほ}にしばしば見とも常
飽かめやも

松本市外生妻縣治朗氏を訪ふ

たづね來し山家の離座敷にて古畫現代畫主人
かける畫

坐を立ちていとま申せば夕日さす立木にとま
り蝸鳴きつ

一つ國信濃はひろし夕日さす低き青田にそへ
る山坂

松本鎌田小學校

學校の玄關先に立ちをれば夏かげふかく柳垂
れたり

黒田英雄氏におくられて

夕露の早くも降りてぬれをりとたちとまりふ
む路のべの草

市穂高小學校

このあたり安曇平のつづぎにて我家の方へ稻
田ひらけつ

ことしまた 凌霄花のうぜんかつら 咲きたれど 弟おとうと 來るといふた
よりなし

風やみて雨となりけり 思おもひしづむ折にふれて
は日日の事すら

承陽大師御眞像

墨染の常のころもの 胸むな びるにくつろぎませり
ものいはすがに

降りいでしはらはら雨の間をおきて音たてに
けり畠の伏屋に

わが屋前に生ふる弱草そよ風の吹くがまにま
に起直りつつ

つね見つつたしかに山の名を知らずきくにも
あらず一年あまり

閑適

今の時筆墨紙のたくはへも乏しくなりて老おい先さき
つまる

よき紙もよき筆墨もありしかど心ゆとりのな
く過あやごしてし

越前のくさとりのこに假名文字をやすやす書
きて老忘れけり

もののさびものの澁味はおのづからいたりつ
く時はじめて知らゆ

黄菖蒲のそこらに咲ける道端の小川流れて青
田へ入りぬ

まむかへば維摩文珠の問答の聴衆の中にまじり入りたり

自らおつか機縁熟して智慧文珠維摩居士との問答は
じまる

法隆寺にてゑがけりとあるからに繪はそ鹿なれども
亡なき友ともしぬばゆ

老の身のたちるもの憂うれしいとけなき孫をよび
ては用いひつけぬ

をさなきがわきて愛かなしく老の身の心弱りて孫
あまやかす

かたはらにゐては繪の本繪の本とせがみて孫
のうるさけれども

巢にかへりくる鳥のごと寄る子らを養ひかね
てわれ嘆くなり

東京は降とラジオの告げたりし三時間を過ぎ
て雨のせまり來

泉野村

六月廿四日堀内皆作氏につれられて同氏宅にやどる

わが住處山やや遠しここに來て石塊坂をいく
のぼりせし

移り住みて信濃は廣し諏訪湖過ぎこの山村の
淳朴を知る

泉野に來りて今宵きく蛙隣こなりの村のここちしに
けり

ここにても耳許みみもと去らぬ田の蛙こよひ一つの卓
にむきあふ

泉野は亡友なきともしのぶところかも蓼科山もながめ
て行かむ

なき友のきたり遊びし語草かたりにくさきき傳へいふ人し
たしけれ

わが友といへど亡人なきひと年月のへだたりゆくを誰
と嘆かむ

山すみの人の心にふれたればまた來り見む泉
野の村

巖温泉

うす暗き風呂場の燈あかり火谷川のうへの引湯ひきゆに人
をおもへり

後記

昭和二十年二月上旬には一先東京を離れて信濃へ移りたい。その前に義齒をつくつて置かねばなるまいと、一月十日齒科醫である良兄（長男）の家に出かけた。午後から降出した雪がやまないので一泊したら、十二時過ぎ空襲で起きた。雪後のよい月だった。うとうととして夜が明けたが、腰が釣つて痛く、やつとの思で歸宅したが、それから病みついた。神経痛で腰が立たずねたきりで、毎日注射でしのいだ。同時に妻が瘰癧で足をわづらひ、歩行困難になつた。老人夫妻これでは覺束なく、無理ではあつたが、三月十四日には背負はれても離京しようと思つた。前夜、新宿驛近く空襲されたので、八王子臨時發午前十一

時といふのに、まごついたが、どうにか乗れた。灯がついて明科驛に着き、ほつとした。約束は出来てゐたが、職人の手都合つかず、五月二十四日迄明科の宿屋に閉籠つた。妻は近くの醫者通ひして足の療治をつづけたが自分は炬燵にかじりついて我慢した。二ヶ月半の辛抱はかなりつらくもあつた。老いては夫妻何の話をするのでもなく、食事は東京にゐて主食物がなかつたりして暮した後なので、妻はしきりに悦んだ。アララギの友だちである武井文雄、薄井計雄両氏に萬事の相談をもちかけて、馴れぬ朝晩をおくつた、内鎌は薄井氏の近くであり、同氏が骨折つて頼入つて借りられた住居なのである。兩氏には迷惑をかけつづけて今日に及んでゐる。また此土地に来て幾人かの友だちが出来た。待ちに待つた五月二十五日内鎌に移つた。川砂を敷いた庭に春の本草の花が咲き競つてゐた。すると、七日目の早朝良弟(次男)が

引きつれて、わが子わが孫の七人が入つて來たのでこれはとすぐ胸を打つた。二十五日夜、空襲をうけて代々木と初台とが焼けた。品川の兄の家に行つたが、次の日に此處も焼けたので、やうやうこちらに今着いたのだといつた。豫期してはゐるけれど無一物の身のふりかたには啞然とした。一同いのちの恙なかつたのをよろこぶのほかはなかつた。

やがてそれぞれ立ち戻つたが、なかなか土地には馴れがたく、神経痛は不治なので、外出は稀であつた。家財は失ひ一定の仕事もなくて、茫然たる日をつづけてはゐるが、丁度眼が覺めると起きるやうな氣持で日日をおくる。永年捨てなかつた歌のために眠つた心がよび起されるのだ。巧拙とか、新舊とか、陳腐も何もなしに、自分だけの力で受入れては生きて行く。自分にけただ一つのたよりなのである。いつも

一つ繰言だが、師友の恩を忘却しがちになつてはならぬのである。

アララギの一人に加はつてはゐるが、生來遲鈍なので、まことに恥入つてゐる。然し今日なほ變りなく大きな廣く深い蔭に餘生を保ち得られるのは有難い極みである。歌集「涌井」は以上の月日の中に二度の春夏を迎へての歌作であるが、抜出して入信歌稿第一編とした。朝夕使用する井の水が涌いてゐるので書名とした。

二十年八月正子（長女）の長男重雄が學徒で召集され、内地に居ながら空襲されて死去した。互に命だけはと慰めたのに、逆さま事に逢つた。

二十一年六月には堀内皆作氏が迎へに來られて泉野村へつれ行かれた。諏訪の森山汀川翁が指圖であつたので歌會には病を押して同席されたが、中座して歸られた。もどりを案じて愛子（三女）が來たので、

これも同行して巖温泉に浴した。山路を牛車で運ばれたりした。この泉野行までを載録した。

山を見ず、海を見ず。また田嶋を知らず。せせこましい都會に住んで、四五日の旅すらも億劫がつたのに、老いて病をこらへながら、交通不便の地に移住しても不自由なく厨の味噌、炬燵の炭まで心配をかけて自分は易易くらしてゐられる。

この一冊の歌集をまとめるにしても自分だけでは出来あがらない。發行所に繁忙な五味保義氏をもわづらはしてしまつた。歌稿の書直しをして下された。出版に關しては加藤洵綾氏の御配慮をも受けた。白玉書房が出版を引受られ、鎌田敬止氏は數日の滞在に歌稿の訂正を援助され、さらに校正をもみて下されたりした。前田進氏、伊藤信太郎氏はかほるがはる鞭撻しに名古屋から出て來た。薄井、武井兩氏の督

勵は申迄もない。入信歌稿第二編「冬空」はこのつづきをあつめた。

感謝のみである。藏書も、書畫も、骨董もなくなつても済む。もし、自分に歌がなくなつたならばどうなるであらう。

昭和二十三年三月三日七十二歳の誕生日に入信山房にて

岡 麓

しるす